今日も僕らは幸せです
『いろいろ』緑色の一日

163

前書き

いろいろ とは

色の名を冠する者達の青春物語

メインキャラクター
虹色研究部
赤井唯人(あかいいと)
明駕橙輝(みょうがとうき)
明駕黄輝(みょうがこうき)
豊緑由樹葉(とよつなゆきは)
青世櫂(はるせかい)
染田藍(そめたあい)
愛川紫音(あいかわしのん)

今回のショートストーリーについて

豊緑由樹葉のとある一日

ショートストーリーメインキャラクター
豊緑由樹葉
秋風紅葉(あきかぜくれは)

朝

ジリリリ。
金属と金属が暗い部屋に打ち響く。
「……うう…ん。」
ベッドの縁、頭の上にある目覚まし時計に手を伸ばし、ぺしりと時計の上に手を置いて音を止める。
もう少しベッドの中に居たい気持ちを抑えて、豊緑由樹葉(とよつなゆきは)は上体を起こし、ベッドから降りる。
部屋の明かりを付け、カーテンを開ける。
硝子張りの引き戸から日差しが由樹葉の緑色の髪と翡翠色の瞳をキラキラと輝かせる。
今日は晴天のようだ。
由樹葉は目覚まし時計の針の位置を確認し、寝坊していない事に安堵し、色彩高校の制服に手慣れた手付きで着替えを済ます。
ドアを開け、リビングに出る。
由樹葉はまずテーブルに目を向ける。
テーブルの真ん中に小さな書き置きが一枚置いてあった。
『明日の昼頃まで帰って来れそうにない。いつも悪いな』
お世辞にも綺麗とは言えないつなげ字が一行書かれていた。
由樹葉にとっては何時もの事だ。
元々豊緑家は四人家族で由樹葉には弟が一人いた。だが、由樹葉が中学生の時に両親が離婚し、由樹葉は父親に引き取られ、弟は母親に引き取られた。だから今日まで父親と二人で暮らしている。
だから、父が朝早くから夜遅くまで働いているのは由樹葉に不自由をさせないためだというくらいはわかっている。
目には見えないけれど、直接感じる事は出来ないけれど子共の自分を大切にしてくれている事を理解している。
だけど、寂しくないと言ったら嘘になるしこの気持ちを抑えるのも由樹葉には何時もの事だ。
由樹葉は複雑な気持ちを家事をする事で忘れるのも何時もの事だ。
朝は何時ものように朝食と弁当の用意をする。
だが、最近は昼に食べる弁当を二人分用意している。
その事が由樹葉には特に寂しい気持ちを消して、楽しい気持ちにさせてくれる。
学校へ行くのが楽しみだ。彼に会えることが。
由樹葉は期待を胸に抱きながら朝食を摂り後片付け、戸締りを済ませた。

登校

由樹葉は待っていた。
待ち合わせ場所である高校の最寄り駅の改札近くの売店前で。
由樹葉が到着してから二本目の下り列車が停車して通り過ぎ、降りてきた人々が次々にピッピッと電子音を響かせ駅の外へと職場や学校へと向かうためばらけて行く。人々の中からこちらに向かってくる一人の同じ制服着た鮮やかな赤髪の男が視界に入る。
由樹葉の待っていた人物がやって来た。
「由樹葉ぁぁーー！会いたかったぁぁーー！！」
彼方からも由樹葉の姿が見えたのだろう。姿が見えただろう瞬間から人混みの間を器用に縫って、叫びながら由樹葉に抱きついた。
「うぁっ！…おはよう、紅葉(くれは)。」
由樹葉は少々驚きはしたが何時ものように紅葉と呼ばれた鮮やかな赤髪の男を受け止めギュッと抱き締め返す。今日も温もりが心地よい。
「由樹葉、おはよう！…昨日は放課後から会ってなくて寂しかった…。」
紅葉は由樹葉に会えた事を確かめるように尚も抱きついている。
「…そうだね…。僕も紅葉に会えなくて寂しいかったよ。兄弟で別々の場所で暮らすのは辛いよね。」
紅葉の背中をよしよしと宥めるように背中を優しく摩る。
鮮やかな赤髪、真紅の瞳をした男子生徒、秋風紅葉(あきかぜくれは)は由樹葉の弟で両親が離婚するまでは一緒に暮らしていた。
「…だけどね、紅葉。流石に朝一駅前で抱きついたら駄目だよ？注目の的になっちゃうし、現在進行形でなってるからね。さ、離して。」
抱きつかれるの嫌いではない。
だが、注目されるのは困る。視線が突き刺さり痛い。
「別にいいじゃん。俺達のラブラブなとこ見せつければさ。」
紅葉は何の問題もないように言い放つ。
由樹葉と紅葉は兄弟であると同時にお互いのことを恋愛対象としてみている恋人同士でもあった。
「別によくないよ⁉　……紅葉らしくて好きだけど。」
紅葉は自分の気持ちに欲求にとても素直だ。素直な性格で大変な目にも何度もあったけど、由樹葉は紅葉のそんなところも好きだった。
「それに、学校に遅れちゃうからそろそろ歩こう？」
由樹葉は別のアプローチで紅葉を説得する。
「…仕方ないな。」
紅葉は渋々、名残惜しそうに由樹葉から離れる。
「さ、行こうか。早く行かないと遅れちゃうよ。」

由樹葉は紅葉を歩くよう促し、紅葉は由樹葉の隣を歩き始める。
最近は由樹葉にとって紅葉との待ち合わせて一緒に登校する事が日常となった。紅葉はこの間転校して来た。
両親が離婚して母親に引き取られた紅葉は母と一緒に遠い実家へと引っ越して数年の間一度も会えていなかった。
だから嬉しかった。
紅葉に会えて。
一緒の学校に通える事が。
たったそれだけの事かもしれない。
だけど、離れ離れだった由樹葉達にはそれだけの事なのだ。
隣に居られる幸せを噛み締めながら登校することも毎日で
「嫌だ！由樹葉と離れたくない！！」
紅葉が3年B組の教室で駄々を捏ねるのも由樹葉にとっては日常だ。

昼休み

コーン、コーン。
三時間目終了の鐘が響く。
「これで授業終了〜。お疲れ〜。」
紫色のウェーブがかった髪、妖しげな光の灯る瞳、不敵な笑顔の養護教諭、愛川紫音(あいかわしのん)の締まりのない声により保健の授業は終わりを告げた。
昼休み突入だ。
由樹葉はスマートフォンを取り出し、紅葉からのメッセージを見る。
『由樹葉、お昼どこで食べる？』
由樹葉は返信する。
『今日は天気もいいし、屋上なんてどう？』
『いいね！気持ち良さそう』
すぐに紅葉からの返信。
『じゃあ、2-Cに迎えに行くね』
色彩高校の校舎は三年生である由樹葉の教室は二階あり、二年生である紅葉の教室は三階にある。
なので由樹葉が紅葉を迎えに行くことに した。
今朝作った二人分の弁当を持って。

階段を上がり紅葉の所属する2年C組までやって来た。
しかし、昼休みの時間で教室は人の出入りが激しく由樹葉は紅葉の姿をなかなか見つけられない。教室前の廊下でうろうろしていると
「豊緑先輩っすよね、こんちは。」
オレンジ色の髪をした生徒が由樹葉に話しかけてきた。
「こんにちは、橙輝(とうき)君。」
オレンジ色の髪と瞳、橙輝と呼ばれた男子学生、明駕橙輝(みょうがとうき)は由樹葉の所属する虹色研究部に所属している。由樹葉の部活の後輩である。
「秋風っすよね？呼んで来ますよ。」
橙輝は仲の良い二人の同級生や周りに振り回されている所為か気が利く。
「いつもありがとね。」
橙輝は分かっていた。大体由樹葉がC組に用がある時は紅葉のことだと。
橙輝は教室へと入って行き、紅葉と共に教室から出てきた。
「紅葉、お待たせ。」
「由樹葉、会いたかったよ！俺、早く由樹葉の作った弁当食べたい！行こ！」
紅葉が目をキラキラさせて由樹葉を屋上へ促す。
「……。」

橙輝の冷たい視線が突き刺さる。
「橙輝君、ごめんね。じゃあまたね。」
「いえ別に。いつも通り安定の仲の良さですし、お邪魔虫は退散しますね。じゃあ、また。」
橙輝は由樹葉に軽く頭を下げて、廊下を歩いて行った。
由樹葉と紅葉は屋上へ向かった。

本来、屋上は立ち入り禁止だ。だが由樹葉も紅葉も貴重な二人の時間を誰にも邪魔されたくないので人気のない場所を好んだ。その為、屋上は好都合であった。
ガチャリ。
屋上へ続く扉を開くとそこは人一人としていない静かな二人だけの空間が広がっていた。
「やったあ！由樹葉と二人っき…」
紅葉は嬉しそうに叫ぶ。
「しー！あんまり大声出しちゃ駄目だよ。先生来ちゃうから。」
由樹葉は慌てて紅葉の口を塞ぐ。
本来立ち入り禁止の場所だ。勿論見つかったらマズイに決まっている。
「〜〜！！」
紅葉はペシペシと口を塞ぐ手を叩く。
もう喋らないから手を退けてと訴える。
気づいた由樹葉は手を退ける。
「ぷはっ！由樹葉ひどいよぉ…。」
紅葉がしょんぼりと由樹葉を見つめる。
「ごめんね。でも、見つかったら一緒にお昼ご飯じゃなくてお説教になっちゃうからね…。」
由樹葉は紅葉を抱き寄せて背中を摩りながら諭す。
教師、特に生徒指導の茶常法厳(ちゃつねほうげん)に見つかったら昼休みが説教で消えるどころか反省文を何枚書かされるか分かったものじゃない。
特に由樹葉は虹色研究部に所属している事で目をつけられているし、紅葉も正直過ぎる性格でちょっとした問題児扱いをされていた。
「…そうだね。俺も幾ら由樹葉と一緒でも説教はやだもん。」
紅葉も理解して大人しくすると言ってくれた。
「じゃあ、お弁当食べよう。今日は紅葉の好きな唐揚げを作ったんだ。」
由樹葉は紅葉に向き直り弁当の中身を告げる。
「マジで！やったあ！早く食べよう！」
紅葉もさっき言われた事を学習して声のボリュームを小さくしてガッツポーズをする。
二人は隣同士に座って、紅葉は由樹葉から弁当を受け取り、弁当の蓋を開ける。
「うわっ！今日も美味しそう！」
紅葉は目輝かせて中身を見つめる。
「じゃあ、せーの。」

「「いただきます」」
由樹葉と紅葉は一緒に声を出して箸をつける。
「んー！今日も由樹葉の弁当は世界一美味しいね！」
紅葉は好物である唐揚げを一口食べる。
「世界一だなんて大袈裟だよ。…でもありがとう、紅葉。」
紅葉は毎日由樹葉の弁当を褒めてくれる。美味しいと言って食べてくれる。こんなにも嬉しい事はない。最愛の弟に弁当を作ってあげられる事、美味しいと言ってくれるが由樹葉には日常になった。他の人にはどうって事もないかも知れないが由樹葉には幸せなのだ。

「ごちそうさまでした。」
紅葉が食べ終わった少し後に由樹葉も食べ終わる。
「由樹葉、ご飯粒付いてる。」
紅葉がクスリと笑う。
「へっ？どこどこ？」
慌てて由樹葉が口の周りを指でなぞる。
「違う違う、ここだよ。」
紅葉がそっと口の左端の下に付いていたご飯粒をそっと摘んで口に入れる。
「由樹葉のおべんと、ごちそうさま。」
紅葉が悪戯っぽく微笑む。
「そんな事しないでよ〜。恥ずかしいよ…。」
由樹葉は顔に熱が集まるのを感じて紅葉から顔を背ける。
「由樹葉照れてるの…？可愛いよ。…ねぇ、もう一つデザート貰っていい？」
紅葉は自分からそっぽを向いてしまった顔を両手で挟み再び自分の方を向かせる。
「く、紅葉⁉　」
由樹葉はいきなり顔を両手で挟まれて困惑する。
「それじゃあ…いただきます。」
紅葉の整った顔が近づいてくる。
そっと触れるだけの口付け。
チュッと音がしただけで離れてしまった。
「ごちそうさまでした。」
紅葉は満足そうに微笑む。
「…いきなり、どうしたの…。」
突然口付けられて思考回路がショートした。
「だって、由樹葉が可愛いから我慢出来なくなっちゃった。」
熱い眼差しを受けて心音が更に速まる。
「…紅葉……。」
「流石に昼休みだしこれでも我慢するね。本当はもっと色々したいんだけど。」

紅葉は本当に残念そうに言う。
「ご飯だけじゃなくて、由樹葉もチャージ出来たし…まあ満足かな♪」
紅葉は口付けだけで嬉しそうだ。
「もう…。紅葉ったら…。」
由樹葉は恥ずかしいが紅葉との甘いやり取りも好きだ。
コーン、コーン。
予鈴がなる。後五分で四時間目の授業が始まる。
「えっ、もう予鈴⁉　急がないと授業に遅れちゃう！紅葉、急いで！」
「うん、急ごう！」
二人きりの昼休みは終わりを告げる。
そして毎回授業開始にギリギリで着席する事も由樹葉にとっては幸せな日常の一部となっていた。

放課後

「起立、礼、さようなら。」
今日の日直の掛け声で帰りのホームルームは終了し、三年B組は解散する。
各々が部活動場所や塾・予備校、アルバイト先へと向かって教室を出て行く。
由樹葉も教室を出る。
「由樹葉！」
教室の前では紅葉が待っていた。
「紅葉、今日は部活だよね。」
紅葉はバスケ部に所属していた。
「うん。由樹葉は今日は虹研ないんでしょ？」
今日は虹色研究部の活動日ではない。
虹色研究部は文化部ということや活動内容が落とし物捜索から恋愛相談、本当に虹色の研究とバラエティに富んであやふやな事もあり普段は週三日程活動している。
「そうだよ。…でも紅葉を待ってる間に虹研の部室で勉強しようかなって思ってる。」
活動日ではない為他の部員は部室には来ず静謐な時間が流れる空間になる。なので、勉強する環境としてはうってつけなのだ。
「じゃあ、終わったら部室に行くね！」
「紅葉、部活行ってらっしゃい。」
由樹葉と紅葉は待ち合わせ場所を決めてその場を別れる。
どうって事のない些末なやり取り。
傍目からはスマートフォンで待ち合わせ場所くらい連絡すればいい事だと言ってしまうだろう。
だが、由樹葉と紅葉には大切な事。
由樹葉と紅葉にとっては三時間も会っていないと互いが恋しくなる。
だから、会いに行ってしまう。
物理的に遠い訳ではない、寧ろとても近くにいる。
由樹葉と紅葉には会いに行かない理由がない。
ただ会うだけでも二人には幸せな事なのだった。

紅葉と別れた由樹葉は虹色研究部の部室の鍵を貰いに保健室を訪れた。
「失礼します。」
由樹葉はガラリと扉を引き、中に入る。独特の薬品の匂いが鼻につく。
白で統一された部屋に目的の人物が座っていた。
「ん～…。豊緑…なんか用かな…？」
気怠げで締まりのない声の主、愛川紫音は伸びをして由樹葉に向き直る。
「部室で勉強したいので部室の鍵借りに来ました。」
由樹葉は用件を伝える。

「偉いね〜…。流石、虹研の良心だわ。」
ガサガサと身につけている白衣のポケットを漁る。
「……あった、あった。はい、鍵。」
ぽんっと由樹葉の手の平に鍵を置く。
「それとも…受験生だからかな…？」
不敵な瞳が由樹葉を捕らえる。
「そうですね。流石に勉強しないとマズイですから。」
由樹葉は進学を希望していた。
「そっか〜。で、その先の将来は如何するの…？」
何故か紫音は根掘り葉掘りと聞いてくる。
「その先は…まだ、決めてはいないです。」
由樹葉には将来の事がまだ縁遠く感じら具体的には考えていなかった。
ただ紅葉と一緒にいたいと思う以外には。
「ふーん…。ちゃんと考えないと後悔するよ…？俺みたいに何処かの部活の後始末をさせられる。あの時になんで責任取るなんて言ったかなぁ…。」
紫音がやたらに絡んできたのは先日の虹色研究部の活動で無茶苦茶やった事で紫音の仕事が増えた事で偶然保健室を訪れた由樹葉への八つ当たりだった。
「すいませんでした。僕がもっとしっかりしていれば…。」
面倒事を嫌っている上に無理言って虹色研究部の顧問になってもらった紫音に後始末をさせてしまっている事に由樹葉は罪悪感を覚える。
「う〜ん…しょんぼりするの止めてくれるかなぁ…？まるで俺が悪者みたいじゃん…？」
紫音は由樹葉の反応に居心地が悪くなった。
「…しょうがないなぁ…豊緑見習って俺も仕事するかなぁ…本当はやりたくないけど…。」
紫音はガタリと席を立つ。
「鍵返す時は職員室の方来て。これから書類片すから。」
「はい。すいませんでした、ありがとうございます。」
保健室を出て紫音は職員室へ由樹葉は虹色研究部の部室へと向かった。

放課後２

由樹葉は保健室で鍵を貰ってから虹色研究部の部室で一人黙々と勉強をしていた。
進学した先の将来は如何するのかという紫音の言葉を頭の片隅に置きながら。
由樹葉にとっては紅葉と一緒にいる事以外は正直よく分からない、いいや、如何でもよかった。
なのでしっかり考えた事もなかった。
悶々としながら問題集を解いて幾ばくの時が経ったのだろう。感覚がなくなった時だった。
ガチャ。
部室の扉が開いた。
「由樹葉、お待たせ！」
鞄を放り投げ、紅葉が元気良く飛びついて来た。
部活をして来た後なのかと疑いたくなるぐらいの勢いがあり、由樹葉は座っていたソファに押し倒された。
「わっ！…紅葉、部活お疲れ様。」
ふんわりと柑橘系の香りが漂う。
至近距離に紅葉を感じる。
真上から真紅の瞳に射抜かれる。
意識しないはずがない。
ばくばくと心音が煩い。
顔が熱い。
気付かれたら恥ずかしい。
紅葉に伝わってしまっただろうか。
「由樹葉、勢い強過ぎちゃった。ごめん！」
何も触れて来ない。
如何やら大丈夫なのか。
由樹葉が安心しかけた時だった。
「…由樹葉、顔赤いね。心臓めっちゃ動いてる。」
間近にいるのだ、身体が密着してるのだ、気付かないはずがない。
「…ねぇ、昼間の続きしよ？」
紅葉が強請ってくる。
「…駄目だよ…ここ学校…。」
誰もいない部室だが、誰が入ってくるとも限らない。
「そうだけど…もう我慢出来ない…。」
熱っぽい眼差し。掠れた声。
紅葉に求められている。
自分も紅葉の事が欲しい。

だが此処は学校。
見つかったらとんでもない。
自分は兄だ。弟を止めるのも兄の役目。
相反する欲望と理性の狭間で揺れる。
「…だけど……っんん。」
紅葉は待てずに強引に由樹葉の唇を塞ぐ。
昼休みの時の軽い口付けではない。
紅葉は由樹葉の唇を割って舌を入れる。
舌を絡めとられる。口内を蹂躙される。
長く深い口付け。
息が出来なくて苦しいはずなのに意識が甘く蕩けてしまう。
気持ち良い。
もうどの位口付けたのだろうか。
やっと紅葉の唇が離れた。
どちらの唾液なのかが分からない糸が繋がって途切れる。
「……はぁ、はぁ…。紅葉……。」
長い口付けのおかげで、酸欠状態。
由樹葉は肩で息をする。
「……ごめん、由樹葉。我慢出来なかった。」
紅葉はいきなり口付けた事を謝るが、まだ足りないと訴えかける。
もっと由樹葉を感じたい、繋がりたい…と。
「…誰に見られるかわからないんだから駄目だよ…。」
由樹葉はなけなしの理性を振り絞る。
だが、紅葉を注意する言葉に説得力はない。
由樹葉自身ももう紅葉の事が欲しくて堪らないから。
完全に理性が崩壊する前に蕩け切った頭を振り絞って考える。
「…でも……。」
紅葉の唇が再び迫る。
一つだけあった。部室を汚さずに互いを満たす選択肢が。
「紅葉…。今日ウチは父さん帰って来ないんだ…。…だから、僕の部屋で続きしよ？」
今朝、テーブルに置いてあったメモ書きがふと頭に浮かんだ。
これなら丸く収まる。
ただ、自分から誘う形になり恥ずかしいが。
「…由樹葉の部屋…！うん、そうしよ！流石、由樹葉！」
紅葉は目を輝かせる。
如何やら上手くいったようだ。
「…でも、由樹葉は辛くないの？さっきので、すごい反応しちゃってる…。」

紅葉は心配そうに見つめる。
由樹葉は口付けだけで自身のものは硬く張り詰めてしまっていた。
「……うう…。どうしよう…。」
完全に誤算だった。
「俺は由樹葉の家まで大丈夫そうだし……抜いてあげようか？」
紅葉はあんなにも激しい口付けをしたのに大丈夫そうだった。
紅葉の言う通りにした方が良さそうだ。
由樹葉は腰も抜けていたし、自身の状態も帰るまでもたないだろうし。
「……紅葉、抜いて…。」
上ずった声が出てしまった。
「うん、わかった。…じゃあ、口と手どっちにする…？」
「……口…でして。」
考えるより先に本能から言葉を発する。
「うん。じゃあ、由樹葉は楽にしてて。多分、腰抜かしてるよね？」
何もかもお見通しのようだ。
紅葉は起き上がり、由樹葉のベルトを外し、ズボンを緩める。
カチャカチャと音がした後に布の擦れる感触、スッと下の方が肌寒くなる。
「…相変わらず、感じ易いよね。」
見られてる。たったそれだけなのに身体が熱くなる。
「…それじゃあ、いただきます。」
紅葉の姿が視界から消える。
由樹葉のものに温かく湿ったザラザラした感触が這う。
「……っ！……うあ…。」
付け根から先端の間を下から上へと舐められる。
快感が伝わる。腰から込み上げる熱。
声が漏れる。
「…由樹葉、気持ち良い？」
紅葉の吐息が由樹葉のものにかかる。
それだけでも今の由樹葉には感じてしまう。
「……ん…。」
頷くだけで精一杯。
「もっとよくしてあげる。」
紅葉は由樹葉のものを口に含む。
舌で鈴口を集中的に舐め回す。
舌先で蜜口を突く。
「…んあっ、そんな、に…やっ…。」
紅葉の攻めに甘い声が抑えれない。

頭の中が快楽で蕩けてゆく。
とろとろと漏れ出す蜜。
「…んー。もうそろそろいい感じだね。…じゃあ次でいかせてあげるよ、由樹葉。」
紅葉は先の方だけでなく、全体を口に入れる。
口を窄めて頭を上下に動かす。
「あっ、はげし…、もう…。」
せり上がる熱いものを感じる。
「……っーーーーーー！！」
由樹葉は頂点に達し、紅葉に熱を解放する。
紅葉はゴクリと由樹葉の蜜を飲む。
ほんの一つも逃さまいとじゅっと先端を吸い上げて口を離す。
「……ぷはっ！由樹葉の精液ごちそうさま。」
由樹葉は解放の余韻に浸り、暫くの間天井を仰ぎみた。

下校

由樹葉は動けるようになってから紅葉と共に後片付けを行い、部室の鍵を閉めて職員室へ向かった。
職員室に入り、書類仕事で疲弊して机に突っ伏している紫音へ鍵を渡す。
待っている間に紅葉は母に連絡を入れ、由樹葉の家とは言えず友達の家と濁して遅くなる旨を伝えた。
校門を出る頃には紅葉との部室での事があったおかげですっかり日が落ちてしまった。
今はまだ夜というには太陽の余韻の残る薄暗い青空。
夜と夕暮れの狭間、殆どの生徒が帰路に着き終わり人気ない通学路を由樹葉と紅葉は隣あって歩く。
「すっかり暗くなっちゃったね。」
「うん、そうだね。……由樹葉、なんか悩んでたりする？」
由樹葉が紫音に言われた事を気にしているのを如何やらお見通しのようだ。
「…うん。高校卒業してさ、大学、そのまた先の就職とか将来の事如何するのかなぁって思ってて…。」
由樹葉は素直に話す。
由樹葉と紅葉の間では隠し事は無理だ。お互いにお互いの事をいつも見てきたから。
気付いてしまうのだ。
自身が気付いていない事も気付いてしまう事もある位互いに敏感だ。
「…うーん、今は分からなくても、きっとこの先に由樹葉が何がしたいのかが見つかるんじゃないかな？」
紅葉は少し考える素振りをして答える。
「そうかな…？」
「きっとそうだよ！それと…由樹葉が将来どうしようもなくなったら俺のお嫁さんになればいいじゃん！俺、由樹葉が不自由しないように頑張って稼ぐから！」
紅葉は真顔で発した。
「ええっ！お、お嫁さん⁉　」
由樹葉は驚く。
「うん！だって由樹葉と結婚したいもん、夫婦になりたいんだもん！」
紅葉は至って真剣だ。彼は正直だから。
「ねぇ、紅葉が頑張って稼ぐって事は僕って専業主婦って事？」
気になった事を聞いてみる。
由樹葉にとっては結婚は気にする事ではない。兄弟で恋人同士なら夫婦位は五十歩百歩に過ぎない。
由樹葉も紅葉も幼いあの日から一生を連れ添うのは紅葉で由樹葉だと決めていたから。
「それでも俺は全然いいよ。」

「流石にそれじゃあ兄としての面子が丸潰れだよ…。僕だって稼ぐし、せめて兼業主婦にして欲しいな。」
「それじゃあ、由樹葉の将来は決まりだね！」
紅葉は笑顔で言う。
「そうだね。」
由樹葉は悩んでた事が阿呆らしくなった。
将来の事はきっとその時に決まる。
今はまだ紅葉とそして虹色研究部のみんなと精一杯残りの高校生活を楽しめばいい。
今日も僕らは幸せです、そう感じたら今はいいのだと由樹葉は思った。
そして今日もそうだったと感じた。日も僕らは幸せです

特別インタビュー

突撃インタビュー
折角電子書籍にしてもツイッターと同じじゃないか？なんて思っている事でしょう。なので今回出てきてくれた由樹葉と紅葉にインタビューを実行します。

163(以下1):こんにちは！
由樹葉(以下由):？…こんにちは
紅葉(以下紅):お前誰だ⁉
1:「誰だ」は傷付くなぁ…君達の生みの親なのに…
由:……？あなたは僕らの父でも母でもないですよね？
1:その意味で使ってないからね、今。
紅:もっとわかりやすく説明しろよ。由樹葉が混乱するだろ！
1:はひっ…すいません…。
由:駄目だよ、紅葉。初対面の人に強く言ったら。
紅:ごめん、由樹葉。……ごめん……なさい。
1:いやいや、そんなにしなくてもいいから。…おっと申し遅れました、わたくしこの作品考えた作者です。
由:ああ、それで生みの親なんですね。でも…そんなに世界観崩れてましたってこの作品…？
1:普段はそんなに崩してないよ。この場は特別！
紅:へぇ〜。作者っていうんだからもっと俺たちのことイチャつかせてよ。由樹葉ともっともっともーっっと一緒にいさせてよ。
1:Oh…。本編でもまあまあイチャつく予定あるし、そこは安心していいよ。
由:く、紅葉、いきなり不躾だよ？
紅:由樹葉はもっと俺と一緒にいたくないの…？
由:いたくない訳ない…一緒にいたいよ。
1:…見つめ合ういい雰囲気のところ申し訳ないのだが、私を忘れちゃおりませか？
由:そ、そうでした。すいません！
1:そんな丁寧に謝んなくてもいいって。それに紅葉君のお願い聞いてあげるし。
紅:マジ？
1:マジ！
紅:やったぁ！
1:心配しなくても私が死なない限りはサイドストーリー沢山作っちゃうよ！
紅:おおー！いい奴だな、あんた！
由:ありがとうございます！
1:立ち話も難だし座って座って。
由:ここって虹研の部室ですよね。

1:そうだよ。やっぱりインタビューするならここかなって思ってさ。
紅:インタビューって？
1:今回の『今日も僕らは幸せです』を電子書籍っぽくした記念に折角だからやろうかなって。
由:じゃあ、僕らが呼ばれた理由ってインタビューする為だったんですね。
1:そゆこと。…それじゃあぼちぼち始めますか！
由:よろしくお願いします。
紅:よろしく。
1:では、1つ目の質問。お互いの好きなところはどこですか？
由&紅:全部。
1:…ありがとうございます(聞いた私がバカだった)。…では、2つ目の質問。逆に困ったなあとか直して欲しいところはありますか？
由:僕には素直でいいんだけど…他の人の前ではオブラートに包んだ言い方とか建前を覚えて欲しいですね。紅葉の将来を考えてもどうしても素直ではいられない時もありますから。
紅:…難しいけど、由樹葉が言うなら…頑張ってみる。
由:ありがとう。
紅:そうだなぁ…。強いて言うなら由樹葉は俺以外にも優し過ぎなとこ。襲われないか見てて心配になる。
由:そんなに僕ってガードが緩い？
紅:うん。
由:気をつけるね。
1:あのー…私いるんで、そういうのは後でお願い出来ますか。
紅:別にいいだろ？なんも悪い事なんてしてないし…寧ろ読者にサービスしてるんだし。
1:あ、はい、すいません。
由:うう…紅葉がすいません。
1:いえいえ…。気をとり直して最後の質問です。最後の方で結婚するなんて言ってましたが詳しくお聞かせ下さい。
紅:いい質問だな！…うーん、そうだな…俺が社会人になって、お金貯まったら結婚式挙げる！それで新婚旅行！由樹葉はどんな感じがいい？
由:うーん…ってやる事前提⁉　…でも、そうだな…式はやっぱり教会かな…旅行かぁ…折角だし、海外行きたいよね。
紅:教会だと…ウェディングドレスかぁ…由樹葉は可愛いからどんな感じでも似合うな！
由:ド、ドレス⁉　恥ずかしいよ…。
紅:顔真っ赤。由樹葉可愛い。
由:うう…。
紅:海外だと俺頑張んなきゃ！今から英語やんなきゃな！由樹葉にかっこいいとこ見せなきゃ！
1:ありがとうございました。もうこれ以上やるとただの惚気にしかならないので終わりにします。
由:…あ、ありがとうございました。

紅:楽しかった、ありがとな！
1:私はこれで戻るけど…お二人さんはそのままにしとくから、後は好きにしなさんな。
紅:やるじゃん！
由:ええっ⁉
1:じゃあね〜。
由:ま、待って！
紅:じゃあな！

後書き

今回はツイッターに上げているものを電子書籍っぽくしました。
本文は丸々同じです。
前書きと後書きを新しくしました(真面目にしました)。
そしておまけをつけました。自作自演インタビューを敢行しました。
どうでしたか？
少しでも楽しめたでしょうか？
良かったら、本編や他のショートストーリーをお待ち頂けたら幸いです。
まだまだ『いろいろ』の世界は広く深くなってます、今後ともみんなを応援して下さい。
ここまで読んで頂きありがとうございました。